

掲載号	6 月 2 週号	
筆者	所属	千葉県農林総合研究センター生産環境部病理昆虫研究室
	職名及び氏名	研究員 國友映理子
題名	千葉県での主なウイルス病の発生動向と対策	
備考	【図説明】 図：ウイルス病診断件数内訳	

【本文】

平成19～23年の間に診断依頼で判明したウイルス病は28病害で、延べ408件でした。その中でトマト黄化葉巻病が最も多く、全体としてコナジラミ類やアザミウマ類など、薬剤抵抗性の発達した微小害虫によって媒介されるウイルス病の発生が多くなっています（図）。

この5年間に県内で新たに発生が確認されたウイルス病は、キク茎えそ病、ウリ類退緑黄化病です。両ウイルス病とも現在も発生がみられ注意が必要です。

1. キク及びトマト茎えそ病

病原ウイルスはキク茎えそウイルス（CSNV）で、キク、トマト、ピーマン、アスター、トルコギキョウに自然感染し、葉や茎にえそ症状を生じます。試験的に接種した場合に多くの植物に感染することが明らかにされていることから、他の作物でも被害が発生する可能性があり、注意が必要です。ミカンキロアザミウマによって媒介され、幼虫の時にウイルスを獲得した個体のみが、成虫になってウイルスを媒介すると考えられています。このため、発病株の抜き取り、ミカンキロアザミウマの防除を徹底します。また、感染した親株から挿し穂をとることによっても伝染するため、キクでは親株の管理を厳重に行う必要があります。

2. ウリ類退緑黄化病

病原ウイルスはウリ類退緑黄化ウイルス（CCYV）で、キュウリ、メロン、スイカなどに感染して葉の黄化を引き起こし、収量の減少や糖度の低下をもたらします。タバココナジラミによって媒介され、媒介虫がウイルスの獲得後に媒介できる期間は10日間程度です。このため、発病株の抜き取り、タバココナジラミの防除を徹底します。ウリ科作物が常時栽培されている地域で問題になりやすく、栽培終了時には施設内の蒸し込みを行い、媒介虫の施設外への拡散を防ぐことが必要です。

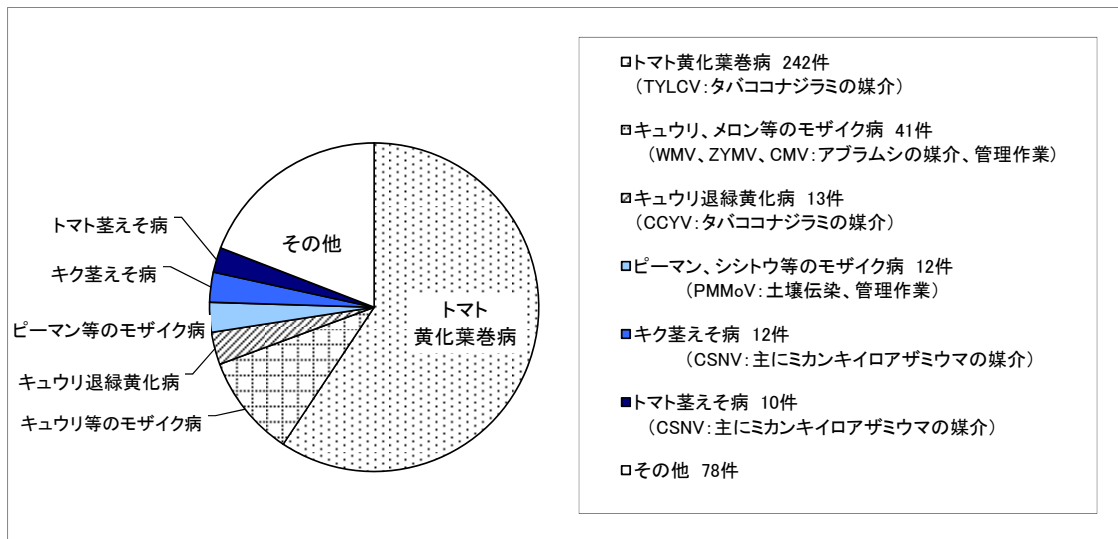


図. 千葉県農林総合研究センターにおけるウイルス病診断件数の内訳
(平成19年～23年)